

文化 第82巻 第1・2号 一春・夏一 別刷
平成30年9月28日発行

移動事象からみる日本語複合動詞の語形成

袁 曉 犇

移動事象からみる日本語複合動詞の語形成

袁 曉 犇

1. はじめに

本稿は、移動事象を表す複合動詞を対象とし、意味的な特徴に基づき、その語形成を考えるものである。移動事象の複合動詞を取り上げる理由には次の三つがある。一つ目は、影山（2008：251）で論じているように、移動動詞は従来の動詞四分類（Vendler1967）と異なる特徴を持っているという点である。このことは、移動動詞を構成要素とする複合動詞の語形成において、動詞四分類に依存する従来の語形成論から独立に考える必要があるということを示している。二つ目は、日本語は移動径路が動詞に語彙化され、移動様態が副次的成分とされる「動詞枠づけ言語」であるが（Talmy 1985）、移動径路および移動様態が一語の複合動詞に現れることが可能であるという点である。これは言語類型論の観点から、移動を表す複合動詞の語形成を考えることが重要であることを意味する。三つ目は、移動事象を表す複合動詞が語彙的複合動詞の中で、多くの数を有し、生産的であるという点である。

移動動詞の枠組みに基づいた複合動詞の体系を考えるにあたって、具体的には次の3つの課題に取り組む。第一に、移動事象を表す複合動詞における主要部の認定について説明する。第二に、移動動詞から複合動詞を形成する際の意味的制約について説明する。第三に、移動動詞の複合における構成要素の生起順序について説明する。

まず、移動事象を表す複合動詞における主要部の認定については、様々に議論されている（影山1993、松本1998、由本2005、影山2013、陳2017など）。最近の研究として陳（2017）があげられる。陳（2017）ではどの構成要素が複合動詞の主要部になれるのかは絶対的な基準で決められるものではなく、構成要素の概念間の相対関係によって決定されると指摘している。本稿では移動動詞の枠組みに基づいた語形成を論じる際に、移動事象を表す意味要素における概念間の相対関係から主要部の説明を行う。次に、移動事象を表す複合動詞の

語形成による意味的な制約については、すでに松本（1998）や由本（2005）で指摘しているように、V1とV2の主語が同一である必要がある。同様に移動事象を表す複合動詞は、そのV1とV2が同一の移動物である必要がある。ただし、V1とV2が同一の移動物であっても、「*進み戻る、*登り下がる」のような複合動詞は形成できない。これらの複合動詞が同一の主語をとるため、理論上で形成可能であっても実在しないことは、移動事象を表す複合動詞の語形成において、別の制約が存在している可能性があることを示唆している¹。最後に、移動事象を表す複合動詞の生起順序について、以下の（1）を例に説明する。

（1） 彼は山道を駆け登る。

（1）では、「彼は山道を駆ける／登る」から分かるように、複合動詞の項「彼」と「山道」はV1とV2に共有される。それにもかかわらず、V1とV2の語順を変えた「*登り駆ける」といった複合動詞が存在しない。このことから、V1とV2の位置にくる動詞には何らかの傾向があることが分かる。

以上のことを踏まえ、本稿を次のように構成する。第二節で先行研究を参照しながら、単一動詞とする移動動詞が持つ特異性について概観し、移動動詞からみる複合動詞の語形成の可能性を示す。そして、言語類型論の理論的枠組みに基づき、複合動詞における主要部の認定方法について説明する。第三節では、松本（2017）が提案した移動表現の分類に基づき、移動事象を表す複合動詞の集計と構成要素の内訳を提示する。第四節では第三節で提示した集計の結果をより具体的に分析し、それぞれを下位分類とする複合動詞の特徴を考察する。最後に第五節で本研究の結論と今後の課題について述べる。

2. 先行研究

2.1 移動動詞の位置づけについて

本稿でいう移動動詞について定義する必要がある。松本（1997：128）によれば、移動とは時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化であるという。松

¹ ここでの意味制約は結果的にGoldberg（1995：82）による「一義的経路の制約」と同様なものである。ただし、本稿では、移動事象を表す複合動詞の語形成を考えるにあたって、V1とV2がどのようにして「一義的経路の制約」に制限されることを考察する。

本の定義に基づき、本稿では物理的な物体を移動物とし、位置変化を表す動詞群を移動動詞と規定する。また、単一動詞の移動動詞と移動事象を表す複合動詞の関係について、次のように考える。由本（2005：106）によれば、複合動詞の形成における制約の多くは、単一動詞が表す事象構造としての語彙概念構造（LCS）が成立するための適格条件であるという。つまり、複合動詞における語形成の諸問題が単一動詞の性質に還元されるといえる。このことから、まず単一動詞である移動動詞の位置づけを明確にする必要がある。この点について、従来の動詞四分類とのかかわりから概観する。

Vendler(1967) は、以下の表1のように、「動的/静的」、「継続的/非継続的」、「終結的/非終結的」といった三つの「語彙的なアスペクト側面」から、動詞(句)が(2)のような四種類に分類されると指摘している。

表1：Vendler（1967）による動詞分類

動詞四分類 \ 特徴	動的 / 静的	継続的 / 非継続的	終結的 / 非終結的
states (状態動詞)	－	＋	－
activities (活動動詞)	＋	＋	－
achievements (到達動詞)	＋	－	＋
accomplishments (達成動詞)	＋	＋	＋

- (2) a. 状態動詞：love, know, resemble, いる, ある
 b. 活動動詞：talk, swim, push, 笑う, 読む, 歌う
 c. 到達動詞：die, reach, recognize, 見つかる, 消える
 d. 達成動詞：build(a house), break(a vase), (家を) 建てる

Vendler の分類を利用し、日本語に適用させると、次のようになる。(2a) の状態動詞は、静的であり、かつ恒常的な時間幅を有する継続的な事象である。限界点を持たない非終結的な事象であることが特徴である。(2b) の活動動詞は動的であり、かつ一定の時間幅を持つ継続的な事象である。(2b) は(2a) の状態動詞と同様に非終結的である。これは、両者とも期間副詞の「しばらく(日本にいた)／一時間(話した)」と共起するが、期限副詞の「一時間で」と共起しないことから分かる。(2c) の到達動詞は何らかの状態から別の結果状態への変化を表しており、動的であるが、活動を含まないため、非継続的である。期限副詞の「一時間で(着いた)」と共起する際に、変化が起きる時点が限界点であるため、終結的である。(2d) の達成動詞は活動動詞と到達動詞を合わ

せ持つことが特徴である。そのため、継続的であり、かつ終結的である。これは「あの一軒家を一年で建てた」のように、「建てる」という活動は、動作の対象である「一軒家」が完成した時点で終結的となり、期限副詞の「一年で」と共起する。

Vendler (1967) によるこの枠組みから、数多くの動詞を個別的にはなく、共通する語彙的アスペクトによって集約的に捉えうることに重要な意味があるといえる。ただし、すべての動詞をこの四分類に含めることには問題がある。そのうちのひとつとして移動動詞があげられる。まず、活動動詞との対照から、移動動詞の特殊性について述べる。これは以下の (3) と (4) にみられる。

- (3) a. 一時間歩いた。
b. 一時間笑った。
- (4) a. 小径を1時間で歩いた。
b. *人を1時間で笑った。

(3a) の移動動詞は期間副詞と共起することが可能であるため、(3b) の活動動詞と類似していると思われる。しかし、(3) と対照的に (4) がみられる。

(4a) では、移動に経路のヲ格を伴う場合、期限副詞の「一時間で」と共起できる。この場合、「歩く」は終結点を持つと認められる。これは、活動動詞 (4a) が目的語のヲ格が現れる際に期限副詞と共起しない点と異なる²。影山 (2008 : 251) は、このような違いを「活動」と「過程」による問題と指摘している。影山 (2008) によれば、活動動詞が持つ活動には変化がない。一方、「歩く」は主語の位置が動いていくことが想定されるため、変化があるという。

以上、「歩く」のような移動動詞について見てきた。続いて、「着く」のような移動動詞について、到達動詞との対照から両者の違いを説明する。これは以下の (5) と (6) にみられる。

- (5) a. 列車が一時間で着いた。
b. スープが一時間で冷えた。

² さらに言うと、活動動詞と移動動詞における対格も異なる。これは以下のような受け身テストから分る。移動動詞の場合、受動態の使用が不可能である。これは三宅 (1996) によれば、経路のヲ格は構造格であり、目的格のヲ格と異なるからであるという。

- a. 太郎はご飯を食べる→ご飯が食べられる。
b. 涙が頬を落ちる→*頬が落ちられる。

- (6) a. 列車が駅に着いた。
b. スープが冷えた。

(5a) は (5b) の到達動詞と同様に期限副詞と共起することが可能である。しかし、(5) と対照的に (6) もみられる。(6a) から分るように、移動動詞が持つ着点は結果状態の判断が重要視される。これは、「着く」という移動が終結した際に、必ず何かしらの着点が想定されるからである。しかし、このような特徴は (6b) に見られない。さらに、Kearns (2002 : 170) では、語彙的アスペクトによる動詞分類が動詞の持つ「動作主性」と相関することを指摘している。(2) をみて分かるように、状態動詞と到達動詞は動作主性を持たないが、活動動詞と達成動詞は動作主性がある。これは以下の (7) と (8) との比較にみられる。

- (7) *Notice the mark on the wall!
(8) a. *スープが冷えようとしている。
b. 列車が駅に着こう (入ろう) としている。

(7) のような到達動詞の notice は命令表現と相いれないため、動作主性がない。日本語の場合も同様である。これは (8a) の「冷える」は意志表現の「う (よう)」と共起できないことから分る。それに対し、駅に入ろうとすることを表す (8b) の「着く」は意志表現の「う (よう)」と共起できるため、動作主性を持つと理解される³。この場合、「着く」を到達動詞に含めることは問題があるといえる。

以上のように、「歩く」や「着く」のような移動動詞は特殊性を持ち、従来における動詞四分類とうまく合致しない側面がある。このような事実を踏まえ、影山 (2010) では、「歩く」のような経路のヲ格と共起する動詞を「移動様態動詞」、「着く」のような着点のニ格と共起する動詞を「有方向移動動詞」と名付け、移動動詞としての意味構造を動詞四分類とは別に仮定している。このことから、影山 (2010) においては移動動詞が独自の枠組みを持っているとみなせる。そして、移動動詞を独立させた分類は、そのほか、上野 (2007:95-106) や松本 (1997:140-144) もあげられる。本稿では、影山 (2010) と同様に

³ 三宅 (1996 : 146) では、乗り物は人の意志的なコントロール下にあるとみなせるため、意志表現が可能であると述べている。三宅による用例は次の通りである。

- a. 新幹線が東京駅から出発しようとした。
b. 船が港から離れようとした。

日本語における移動動詞を以下の(9)と(10)のように分類する。

- (9) 移動様態動詞：滴る, しなだれる, 流れる, 転がる, 転ぶ, 跳ねる, ほとぼしる, 舞う, まろぶ, 歩く, 歩む, 滑る, 駆ける, 潜る, 連れる, さまよう, 跳ぶ, 走る, 這いずる, 馳せる, 這う, 急ぐ, 泳ぐ, 飛ぶ, 回る, 突く, 沿う
- (10) 有方向移動動詞：起点; 出る, 出づ, 去る, 遠ざかる, 逃げる, 離れる, 立つ, 起きる, 抜く, 来る / 中間経路; 通う, 越える, くぐる, 抜ける, 迎る, 巡る, 通る, 横切る, 過ぎる, 進む, / 着点; 移る, 沈む, 帰る, 寄る, 上る, 登る, 下りる, 昇る, 込む, 上がる, 下がる, 下る, 降りる, 入る, 渡る, 着く, 届く, 近づく, 戻る, 迫る, 立つ, 伏す, 退く, 越す, 貫く, 乗る, 返る, 行く

ただし、日本語の移動動詞のすべてがこの二分類に入るとは限らない。(2)の分類に含まれるものも存在する。たとえば、到達動詞において、状態変化と位置変化動詞の二種類がある。位置変化動詞は、意志性を持たない類であり、(10)と区別される。その語例を以下の(11)に示す⁴。また、達成動詞の中には、使役移動動詞が属している。使役移動動詞は(9)と(10)に見られないものであるため、その語例を以下の(12)に示す。

- (11) 位置変化動詞：起点; 現れる, 生まれる, 浮かぶ / 着点; あふれる, 崩れる, こぼれる, 伝わる, 漏れる, 当たる, 止まる, 付く, 広がる, 落ちる, 散る, 浮く, 染みる
- (12) 使役移動動詞：取る, 置く, 寄せる, のける, 着ける, 付ける, 移す, 埋める, 下げる, 沈める, 届ける, はめる, まぶす, 広げる, 回す, 渡す, さげる, 動かす, 下す, 散らす, こぼす, 流す, 飛ばす, 転がす, 入れる, 出す, 上げる, 落とす, 下ろす, 通す, 戻す, 返す, 掛ける, 載せる, 投げる, 進める, 与える, やる, よこす

移動動詞を Vendler(1967)による動詞四分類とかかわらせながら整理していくと、移動動詞は独自性を持ちながら、既存の動詞分類と重なる部分もあるということが分かってくる⁵。このような特徴を持つ移動動詞の独自性は以下の

⁴ 位置変化動詞である到達動詞の中には、特殊なものが入っている。例えば、「火が(向こう岸まで)広がった」のように、移動物である火の面積が拡大するという点で、移動事象を成すものがあると認められる。

図1に示すことができる。

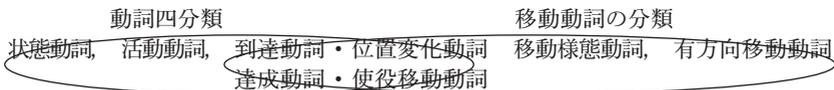


図1：移動動詞の体系

さらに、図1にある四種類の事象構造を持つ移動動詞をもとに四種類の移動事象を表す複合動詞が存在することが想定できる。それぞれの複合動詞とする特徴について、さらなる分析が必要となる。ただし、移動事象を表す複合動詞の下位分類の考察に入る前に、単独動詞にはない問題、つまり、複合動詞の主要部の認定方法について述べる必要がある。これを次節で述べる。

2.2 移動を表す複合動詞の主要部の認定方法について

2.2.1 言語類型論による理論枠組み

この節では、Talmyによる言語類型論の概念について紹介する。これに基づき、複合動詞における主要部の認定方法の可能性を探ってみる。Talmy(1985, 1991)は、言語間における移動表現の差異から、移動事象が表す意味的類型論を提唱する。Talmy(1985)では、移動を表す動詞の中に、「図」、「経路」、「地」、「様態」、「原因」といった移動に関するさまざまな要素が存在することを指摘している。Talmyはこのうちのどの要素が移動動詞に「語彙化」されるかによって、世界の言語を大きく様態を動詞に語彙化するタイプと経路を動詞に語彙化するタイプに分ける。前者は、英語やドイツ語などがあげられ、後者は日本語やスペイン語などがあげられる。そして、Talmy(1991)では、意味要素の語彙化から「イベント統合の類型論」に発展する。イベント統合の類型論は複合的なイベントが単一節においてどのように統合され、表現されるかという観点に基づいたものである。これを理解するために、以下の(13)を参照されたい。

- (13) a. ボトルは浮かびながら洞窟から出ていった。
 b. The bottle floated out of the cave.

(13)のいずれも移動様態と移動経路を統合した複合的なイベントである。

⁵ しかし、個々の移動動詞と動詞分類が一对一ではない。複数の項目にまたがることがある。本稿では、両義的の解釈ができるものはそれぞれの分類に入れている。

イベント統合論の説明について、松本（2017：7）では次のようにまとめている。（13）が表す移動事象において、主要な役割を持つ事象は「枠付けイベント」である。枠付けイベントに対する補助的な事象は「共イベント」である。枠付けイベントと共イベントが統合された複合イベントは「マクロイベント」である。そして、マクロイベントの中で、主要な役割を持つ経路がどの表現形式によって表現されるかが世界の諸言語を類型化できる⁶。（13a）のような経路が主動詞の「出ていく」で表される言語が「動詞枠づけ言語」であり、（13b）のような経路が付随要素の前置詞句「out of the cave」で表される言語が「衛星枠づけ言語」とされる。

ここまで、Talmy による類型論が意味要素の語彙化からイベント統合論に発展してきたことについて見た。また、（13）の例から分かるように Talmy の類型論は文の構成に関する類型論である（松本（2017：6）も参照）。このことから、類型論の観点から文構成に関する主要部の判定について次のように考えられる。（13a）では意味要素の経路は主動詞によって表示されている。この場合、経路を表す主動詞は文の主要部でもある。一方、（13b）では意味要素の経路は文の非主要部である。この場合、意味要素の様態は主動詞によって表示されており、文の主要部である。これについて、松本（2017：16）では、動詞枠づけ言語は「（経路）主要部表示型言語」であり、衛星枠づけ言語は「（経路）主要部外表示型」言語であることを明確に区別している。

以上を踏まえ、筆者は移動事象を表す複合動詞の主要部の判定について、Talmy の類型論をもとに次のように考えられる。複合動詞は構成要素の V1 と V2 から複合的なイベントが形成され、かつ、複合的なイベントは単一節に統合されている。このことから、複合動詞における主要部を文構成レベルで考えることが可能である。そして、日本語は松本（2017：6）でいう経路主要部表示型言語であり、その主要部が意味要素の経路によって表示される。このことから、複合動詞の中で、構成要素のどちらに意味要素の経路が現れるかで主要部が決まるということになる。

⁶ 経路が主要な役割を持つ点については、位置変化を意味する経路が移動事象の成立のための必要条件であるからと思われる。

2.2.2 主要部の認定について

前節では、Talmy の類型論をもとに移動事象を表す複合動詞の主要部の判定に関する理論的枠組みを提示した。この節では、移動を表す複合動詞の主要部の認定について、具体例をあげながら説明する。まず、経路が複合動詞の V2 にある場合について述べる。この場合は、以下の (14) を例に考えていく。

(14) 彼は山頂に駆け登った。

(14) の複合動詞が表す移動事象は単一節に収まり、V1 が統合された移動事象の様態を表している。また、V2 は移動経路を表し、「山頂に * 駆ける / 登る」があるように、複合動詞の主要部は V2 になる。ただし、注意されたいのは、「駆け登る」の場合、「山道を駆け登る」もある。この場合、「山道を駆ける / 登る」のように、経路は V1 と V2 に共有されるため、主要部の判定にあいまいさが生じるように思われる。しかし、V2 の「登る」は移動における方向性も含意する。一方、V1 「駆ける」は方向性を含意しない。これは「* 彼は平原を駆け登った」がいえないように、複合動詞が表す経路は上方向でなければならない。そのため、方向性も含意する V2 が主要部と考える。続いて、V1 が主要部の複合動詞については、以下の (15) を例に考えていく。

(15) 彼は5キロを走り抜いた。

(15) においても、複合動詞が表す移動概念は単一節に収まっている。そして、「5キロを走る / * 抜く」から分かるように、V1 は統合された移動事象の経路を表している。V2 は実質のない意味を失い、単に移動事象の終結を表しているため、V1 が主要部と分析することができる。

ここまでは意味要素の経路が V1 と V2 のどちらにあるかで主要部の判定を行った。このような分類基準は、影山 (2013) による「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」の判別と基本的に対応しているように思われる⁷。しかし、本稿では V1 が主要部とみなす複合動詞について、影山 (2013) による判定基準と異なる例もある。これは以下の (16) にみられる。

⁷ 影山 (2013) によれば、「主題関係複合動詞」とは「踏みつぶす」、「はじけ飛ぶ」のような V1 と V2 がそれぞれ本来の意味と項構造を有する典型的な語彙的複合動詞であるという。一方、「アスペクト複合動詞」とは「(雨が) 降りしきる」、「(論文を) 書き上げる」のように項関係・格支配をもつばら V1 が担当し、V2 は V1 の事象の在り方に対して補足的な意味を加える機能動詞であるという。

(16) 赤ちゃんが床を這い回った。

(16) の「這い回る」は「這って、回る」に言い換えられるため、影山 (2013) では主題関係複合動詞としており、V2 が主要部となる。しかし、「*赤ちゃんが床を回る」のように、V2 の「回る」は (16) が表わす移動事象を代表することができない。一方、経路が明示された (16) の場合、「赤ちゃんが床を這う」があるように、複合動詞が表わす移動事象は移動様態動詞の V1 によって表現されている。このようなものについては、本稿では V1 主要部とみなす。

さらに、少数ではあるが、経路が V1 と V2 に共通するものが存在する。これは以下の (17) にみられる。

(17) 電車は駅を通り過ぎた。

(17) について、「電車は駅を通る／過ぎる」があるように、V1 と V2 とも複合動詞としての項をとっており、移動経路は V1 と V2 に共有される。この場合、V1 と V2 はともに主要部をなしており、共主要部の複合動詞と考える。

2.3 本稿の分析上の立場について

本節では、本稿の分析上の立場について述べる。複合動詞の語形成に対するアプローチは合成的な立場と非合成的な立場に分かれる。合成的な立場は、複合動詞全体の意味がその構成要素の意味の統合に還元できるということである。影山 (1993)、由本 (2005) では、項構造と意味構造から複合動詞の語形成について分析している。両者による表示レベルは異なるが、いずれも複合語が合成的という立場をとっている。

一方、非合成的な立場は、複合動詞は必ずしも構成要素の合成から、その意味が導かれるとは限らないということである。このような立場をとるのは、石井 (2007)、陳 (2017) などがあげられる。本稿では、複合動詞の形成について、後者の非合成の立場をとる。これは、石井 (2007) では複合語が要素の組み合わせからは説明できない「ひとまとまり性 (特殊化去れた習慣的な、ひとまとまり的な意味)」を認めることができると指摘しており、本稿でもその立場に従うからである。ただし、非合成の立場をとっても、複合語における構成要素がどのように結びつき、複合語として作られるかを分析することが可能である。この点については第四節で詳しく述べる。

3. 調査方法と結果

本稿では、「複合動詞レキシコン」⁸に収録されている2760語を調査の対象とする。2760語のうち、移動事象を表すものを選出する。移動事象についての判定は松本(2017:1)の分類を参照する。松本(2007)では、移動事象に以下の(18)のような三つのタイプがあると指摘している。

- (18) a. John walked into the house.
 b. Susan threw the ball into the room.
 c. Bill looked into the hole.

(18)の移動事象はそれぞれ、主体移動表現、客体移動表現、抽象的放射表現と呼ばれている。本稿では、(18ab)における主体移動と客体移動を表す複合動詞を考察の対象とする。(18c)の抽象的放射表現は抽象的移動と合わせ、別稿で議論したい⁹。また、調査に際しては、「複合動詞レキシコン」に記載されている名詞から逆形成されたものを対象外とする。これは例えば、「置き去る」があげられる。また、「追っ付く」のような「追いつく」から音変化した複合動詞を重複例とみなす。そして、「突き進む」の「突く」、「差し迫る」の「差す」のようなもとの意味が失われ、接辞となったものを対象外とする。これらのことを踏まえて数えると、移動表現を表す複合動詞は全部で980語あり、語彙的複合動詞全体の約三分の一を占めていることが分かる。

980語のうち、経路がV2に語彙化されており、V2が主要部の複合動詞は881語ある。この場合、複合動詞があらわす事象は、図1にある移動様態動詞、有方向移動動詞、位置変化動詞、使役移動動詞の四つの動詞タイプによって表される。この場合、V2はさまざまなタイプのV1と組み合わせることが可能である。その内訳と集計の結果を以下の表2に示す¹⁰。

⁸ 複合動詞レキシコン : <http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>

⁹ 抽象的放射を表す複合動詞は「見上げる」、「覗き込む」などがあげられる。これらの複合動詞は本稿でいう移動事象を表す複合動詞と次の点において異なる。一つ目は松本(1998:183)によれば、「空を見上げる」の場合、上方にあげる対象はその放射物(視線)であるという点である。この場合、移動物が複合動詞の項として実現しない。二つ目は、視線のような放射物は具体性を有しないという点である。これは本稿でいう物体(具体物)の位置変化を表す移動概念と異なる。

¹⁰ 表2では、到達動詞と達成動詞とするV1の中で、位置変化動詞と使役移動動詞を含む。

表 2 : V2 主要部の内訳

V1 \ V2	活動動詞	移動様態動詞	有方向移動動詞	到達動詞	達成動詞	総計
移動様態動詞	11	2	3	2	1	19
有方向移動動詞	148	86	34	20	8	295
位置変化動詞	18	6	5	13	2	44
使役移動動詞	419	9	4		91	523
総計	595	103	46	35	102	881

一方、移動経路が V1 に語彙化されており、V1 が主要部の複合動詞は 96 語存在する。この場合、V1 の動詞タイプに活動動詞も加えられる。この点については 4.2 節で詳しく述べる。また、V2 が意味の希薄化しており、その動詞類型を図 1 から正しく予測することが困難であるため、内訳の集計を行わないことにする。V1 主要部の複合動詞の内訳と集計の結果を以下の表 3 に示す。

表 3 : V1 主要部の内訳

V1	総計
活動動詞	37
移動様態動詞	17
有方向移動動詞	20
位置変化動詞	5
使役移動動詞	17
総計	96

最後に、少数ではあるが、(17) の「通り過ぎる」のような共主要部の複合動詞について、その語数が少なく、かつ複合語の形成が比較的明瞭であるため、本稿では枠組みの提示だけにとどめておきたい¹¹。

¹¹ 共主要部の複合動詞は、移動事象を表す複合動詞の中にわずか 3 例しかない。これは、「通り過ぎる」、「飛び跳ねる」、「入り込む」である。本稿では、共主要部の複合動詞について、理論的枠組みを提示することに留めておき、これ以上は深入りしないことにする。

4. 分析

この節では、第三節の集計に基づき、4.1 節では四種類の合成パターンにそって、構成要素の組み合わせから、V2が主要部の複合動詞が形成される際の特徴と制約について考察する。そして、移動事象を表す複合動詞の生産性と形成の制約から、V1とV2の位置にくる生起順序の傾向について説明を試みる。4.2 節ではV1が主要部の複合動詞を考察する。

4.1. V2が主要部の複合動詞

4.1.1 V2が移動様態動詞の場合

表2から分かるように、V2が移動様態動詞の場合、その全体の数が少なく、非生産的である。(9)にある移動様態動詞のほとんどはV2として現れない。また、V1の中で、到達動詞あるいは達成動詞はほとんど現れない。これらの動詞が表す客体移動の移動物は、V1になる際にV2の移動物と異なる。松本(1998)による「主語一致の原則」を守っていないため、複合動詞の形成が不可能と考えられる。また、このタイプの複合動詞において、例外的に「～歩く」や「～飛ぶ」のような比較的に生産的なものもある。とくに「～歩く」がこのタイプの中で最も生産的なものとしてあげられる。ただし、「～歩く」を精査していくと、単一動詞が表す手足の動きという様態成分が失われていることが分る。これは以下の(19)にみられる。

(19) 夜の街を飲み歩く／町を尋ね歩く／彼は各地を流れ歩いた。

(19)の「飲み歩く」はあちこちの店に行って酒を飲むことを表している。この場合の「～歩く」は広義としての移動を表している。同様のことは「尋ね歩く」と「流れ歩く」にもいえる。

また、V2が移動様態動詞の場合、V1の動詞タイプにかかわらず、V2に対しての様態修飾を果たしていることが多くみられる。たとえば、「流れ飛ぶ」のV1は到達動詞であり、典型的な様態性を持つわけではないが、複合動詞全体としては「乱れるように飛ぶ」とパラフレーズができるため、V1はV2の移動様態を表しているといえる。

4.1.2 V2が有方向移動動詞の場合

表2から分かるように、V2が有方向移動動詞である複合動詞は二番目に生産的である。(10)では、個別的なもの(「遠ざかる」や「～逃げる」)を除き、

そのほとんどはV2として現れることが可能である。また、V1の中で、活動動詞や移動様態動詞が多く現れている。これはこのタイプの複合動詞がもつ典型的な合成パターンと考えられ、V1はV2の移動様態を表している。一方、達成動詞はほとんどV1に現れることがない。これは達成動詞が客体移動を表し、有方向移動が表す主体移動と異なり、両者の移動物が一致しないため、複合動詞の形成が不可能と思われるからである。さらに、V2が有方向移動動詞の複合動詞に関して、特筆すべきことはV1とV2がともに移動動詞の場合である。この場合は、複合動詞の合成において、V1とV2が同一方向性にある経路上で移動する必要がある。この必要性は以下の(20)から理解できる。

- (20) a. 私は家に帰り着いた。
b. 彼はトンネルを通り抜けた。

(20a)においては、「家に帰る／着く」のように、V1とV2は同一の着点を取る必要がある。また(20b)においても、「トンネルを通る／抜ける」のように、V1とV2は同一の経路を取る必要がある。このような特徴は、移動を表す複合動詞が持つ語形成上の制約でもあると思われる。そして、「*進み戻る、*登り下がる」の動詞はV1とV2が異なる経路をたどっているため、この制約により、複合動詞としての形成が不可能であると説明できる。しかし、この制約の説明力は形成可能な複合動詞に限定されている。これは、同一の経路をたどっても、「*戻り着く」のような理論上で形成可能なものでも、実際に存在しない例もあるからである。

4.1.3 V2が位置変化動詞の場合

表2から分かるように、V2が位置変化の到達動詞であるものは、移動様態動詞に続き、二番目に非生産的である。(11)のリストからは、複合動詞のV2としてほとんど現れない。「～当たる、～止まる」のような動詞がV2にあっても、用例数が少なく、非生産的である。また、達成動詞はV1に現れない。これは、「*動かし落ちる」のように、主語一致の原則に違反するためである。ただし、このタイプの複合動詞において、例外的に「～落ちる、～付く」が生産的である。その理由は、「落ちる」と「付く」は位置変化動詞でありながらも、有方向移動動詞としての特徴も持つからであると考えられる。これは「崩れる」などのような到達動詞にない特徴である。ここで、「落ちる」を例にした以下の(21)を用いて説明する。

- (21) a. 涙が頬を落ちる。
 b. 涙が地面に落ちる。

(21a) では、「落ちる」が経路のヲ格と共起するもので、(21b) では着点のニ格と共起するものである。つまり、「落ちる」が V2 になる際、移動の経路と結果の両方を持つことが可能である。この特徴は複合動詞の生産性において重要になってくる。たとえば、「*舞い現れる」のような複合動詞は存在しないが、「舞い落ちる」は問題なくいえる。「*舞い現れる」を作るには、先述したように V1 と V2 が同一方向の経路上での移動が必須である。しかし、「(雪が空を) 舞う」が表わす移動方向と、「現れる」が持つ着点への到達は同一の経路上にあると見なすことができない。そのため、複合動詞としては形成不可能である。一方、「落ちる」が V2 の場合、(21a) のように移動経路を表すことが可能である。この場合、V1 と V2 の同一方向の経路上での移動が可能であるとみなせるため、複合動詞が成立する。さらに、(21b) のように「落ちる」は着点も持つため、「雪が地面に降り落ちる」のように、着点を含意する「降る」を V1 にとることも可能である。

4.1.4 V2 が使役移動動詞の場合

表 2 から分かるように、V2 が達成動詞である複合動詞は一番生産的である。(12) のリストのうち、多くの動詞は V2 に現れることが可能である。とくに、「～上げる、～下げる、～返す、～落とす」のような方向性を含意するものと、「～つける、～入れる、～込む」のような着点を含意するものが多く現れている。そして、複合動詞の多くは「切り倒す」のような V1 が活動動詞をとるものである。この場合、V1 が V2 の手段を表す複合動詞が多く現れる。また、移動事象を表す複合動詞という観点からみた際に、付け加える点の一つある。それは、一部の用例において、V1 が何らかの方向性を持ち、その方向性は V2 が表わす移動方向と一致しなければならない。これは、以下の (23) の例から分かる。

- (23) a. 彼はミカンを袋に掴み入れた。
 b. 彼は大木を押し倒した。
 c. 彼は妻を玄関に抱え入れた。

(23) における動作動詞の「掴む、押す、抱える」は、本来方向性を含意しない。複合動詞の V1 になる際に、いずれも V2 が表わす方向性と同様に動作を

仕向けることが想定される。これはおそらく、動作主の移動物に対する動作は客体移動の期間において継続的であることから起因していると思われる。

続いて、V1として現れにくいものについて検討する。表2から分かるように、移動様態動詞にはV1が少ない。たとえV1にあっても、その多くは「舞い上げる」のようなタイプである。このタイプのものについて、そのほとんどは対応する自動詞が存在する。影山(1993)によれば、「舞い上げる」は「舞い上がる」による逆形成とされるものであるという。影山のこの指摘が正しければ、このように逆形成されるものは、例外的なものと考えられる。また、有方向移動動詞と位置変化の到達動詞がV1に来ることも少ない。これは有方向移動動詞と位置変化動詞が表わす移動事象は主体移動であり、これは使役移動による客体移動の移動物と異なるため、複合動詞の合成が不可能と思われる。ただし、以下の(24)のように、例外的に有方向移動動詞の「乗る」をV1とする合成パターンがみられる。

(24) 彼は自転車を車庫に乗り入れた。

(24)の場合、V1の主体は彼であり、V2の移動物は自転車である。彼は自転車に乗ることで、主体と客体が同一物になっていると見なすことができるため、複合動詞の合成は可能となる。

4.1.5 移動を表す複合動詞の生起順序

ここまでの内容を踏まえ、移動事象を表す複合動詞のV1とV2が、図1にある四つの動詞タイプの場合のそれぞれの生起順序も見えてくる。4.1.1節では、移動様態動詞がV2になる際、複合動詞としての生産性が低く、例外的に「歩く」のようなV2が広義としての移動となるものに限り、複合動詞の生産性が高まることを述べた。4.1.1節の現象と相まって、4.1.2節では、有方向移動動詞がV2になる際、多くの動詞タイプのV1と結合することが可能であるということから、V2が移動動詞である際に生産性が高いことを支持することを示した。4.1.3節では、一般的に到達動詞をV2にする際は複合動詞としての生産性が低いことを述べた。例外的に、「落ちる」や「付く」のような経路を表すことが可能な到達動詞がV2になる際には、複合動詞として生産性が高まる。これもV2が移動動詞として安定性を持つことを示唆している。最後に4.1.4節では、使役移動動詞のV2が一番生産的である点についてみてきた。表1とのかかわりから、V2を主要部とする場合、複合動詞における生産性は以下

の図2のように示すことができる。

移動様態動詞 < 位置変化動詞 < 有方向移動動詞 < 使役移動動詞

図2: V2 主要部における生産性の順序

図2は、主要部であるV2の造語力の強弱を示すものである。図2の右に行けばいくほど、V2としての生産性が高まることを意味する。そして、図2による造語力の強弱から、冒頭で述べた「山道を駆け登る」が可能であるのに対し、「*山道を登る駆ける」が不可能である問題について、一定の説明を与えることが可能になる。「登る」は有方向移動動詞である。有方向移動動詞はV2としての生産性が高いため、複合動詞の形成が容易である。一方、「駆ける」は移動様態動詞である。移動様態動詞はV2としての生産性が低いため、複合動詞の形成が困難である。これにより、両者の入れ替えが行えなくなるのだと考えられる。

4.2. V1が主要部である複合動詞の場合

この節では、V1主要部の複合動詞について説明する¹²。説明の際に、様態と経路の相対関係から複合動詞の語形成について考える。まず、V1が移動様態動詞の場合について、以下の(25)の用例にみられる。

(25) 白鳥が大空に飛び立った。

(25)は白鳥が空中に飛び上がることを表している。「*空に立つ」が不可能であるように、V2の「立つ」は経路を含意してないため、主要部とはいえない。そして、「空に(へ)飛ぶ」があるように、へ格と入れ替えることが可能である。この場合、V1に移動の方向性が含まれている¹³。V1に含意される方向性は、経路の延長線上にあるものとみなせる。そのため、疑似的な経路と理解される(似た指摘としては松本1997:212も参照)。疑似的な経路は複合動

¹² V1主要部の複合動詞については、松本(1998:59)でいう「(桜の花が) 散り急ぐ」のような「比喩の様態」のもの、または「降り注ぐ」のようなV2がV1に対し、副詞的修飾を表すものがあげられる。これらのものについてはV1を主要部とする複合動詞であるが、本稿で取り上げる経路による主要部の判定基準と異なるものとする。

¹³ 移動様態動詞は、着点を表すニ格と共起しない。ここでのニ格は「~のほうに」と解釈することが妥当であるため、方向性と考える。

詞が持つ経路と同様に考えることができるため、V1を主要部とみなす。V2「立つ」はV1の動作を補強しているように思われる。これは(25)が単に「白鳥が大空に飛ぶ」といえることから分かる。さらに、移動様態動詞のV1に方向性を含意するものとして、「連れ回す」のような複合動詞がある。これは以下の(26)にみられる。

(26) 両親は子供を(あちこちに)連れ回した。

(26)が意味する移動は両親と子供の両方が関わらなければならない。このような意味を反映させることができるのはV1のみである。これは、たとえ「子供を回す」といった移動が成立しても、両親は必ずしも移動するとは限らないということである。一方、両親は子供をあちこちに連れて移動することが可能である。そのため、主要部はV1であると思われる。ただし、「連れ回す」は「飛び立つ」と異なり、V2はV1の意味を補強するのではなく、むしろ、V2が表す移動はV1と重なるように思われる。つまり、両親は子供をあちこちに連れていくことで、子供を回すことになるということである。このタイプと類似する例は、2.2.2節の「這い回る」があげられる。次に、V1が有方向移動動詞の場合、以下の(27)にみられる。

(27) 船が岩の上に乗上げた。

(27)のV1「乗る」は「踏み台の上に乗る」があるように、ものの上にあがるという意味を持つ。この場合、V1は移動経路と移動の方向性の両方を指定することが可能である。そして、「*船が岩の上に乗上げた」が不可能であるように、複合動詞が表す移動経路はV1によるものと理解され、V1が主要部となる。V2はV1の移動に対する方向性を補強すると考える¹⁴。続いて、V1が使役移動動詞の場合について、以下の(28)を取り上げて考える。

(28) 彼女は彼にバッグを投げ付けた。

(28)のV1は使役移動動詞である。この場合、「二重ヲ格の制約」によって、経路のヲ格と共起することができない。ただし、(28)において、「彼にバッグを投げた」がいえるように、「投げる」の動作は「彼」に向かわなければならないことを含意している。V1「投げる」に含意される方向性は、疑似的な経路

¹⁴「乗上げる」は「乗り上がる」の派生形と思われる。しかし、「複合動詞レキシコン」で調査したところ、「乗り上がる」が登録されていない。そのため、必ずしも「乗上げる」と「乗り上がる」の間に派生関係があると考えする必要はない。

を有するとみなせる。一方、「*彼にバッグを付けた」のように、V2による移動は成立しない。このことから、V1が主要部とみなせる。

最後に、V1が活動動詞であるものについてみる。このタイプは、V1が活動動詞であることから、移動事象を表さないとと思われるが、移動様態動詞と同様、V1が方向性を含意することで、疑似的な移動経路を有する。これは以下の(29)にみられる。

(29) その店は彼女に請求書を送り付けた。

(29)のV1は活動動詞であり、一般的に移動経路を有しない。しかし、「彼女に請求書を送る」があるように、V1の動作に対する受け取り先が必要である。そのため、V1の動作に方向性が含まれていると思われる。この場合もV1が疑似的な移動経路を有すると思われる。そして、「*彼女に請求書をつける」が不可能であるように、V2による移動動作が成立しない。V1に疑似的な移動経路があることで、複合動詞の主要部とみなせる。また、(29)の複合動詞は「彼女に請求書を送った」とパラフレーズができるように、V2はV1の動作を補強しているように思われる。V1が活動動詞で、かつ主要部とする複合動詞はそのほかに、「(会社)に泊まり込む」、「(古本屋に本を)売り飛ばす」、などの例があげられる。いずれもV1の動作に方向性を含意しているものである。

以上のように、V1が方向性を含意することで、複合動詞が表す移動経路を有することになり、V1が主要部になるということについて見てきた。この場合のV2はV1の動作を補強するか、あるいは、V1の移動経路と重なるかで、主要部となる機能を失う。

5. おわりに

本稿では移動事象を表す複合動詞を対象に、意味特徴に基づき、日本語の複合動詞を新たに分類し、それぞれの意味特徴について考察を行った。本稿の考察を通し、次の三つのことを明らかにした。一つ目は、先行研究との比較を行うことで、移動事象を表す複合動詞の主要部について、以下の表4のようにまとめたことである。

表 4 (先行研究との比較)

Talmy (1985) に基づいた本稿の分類	V2 のあり方	影山 (2013) の分類
移動経路が V2 にあるタイプ (V2 主要部)	移動様態動詞	主体関係複合動詞
	有方向移動動詞	
	位置変化動詞	
	使役移動動詞	
移動経路が V1 にあるタイプ (V1 主要部)	V1 への意味補強/ V1 の経路と重なる	アスペクト複合動詞/ (一部の) 主体関係複合動詞
移動経路が V1 / V2 にあるタイプ (共主要部)	V1 と並列する	主体関係複合動詞

二つ目は、V2 を主要部とする移動の複合動詞の中で、使役移動動詞、有方向移動動詞、位置変化動詞、移動様態動詞の順で複合動詞の造語力が低下していくことである。このことから、複合動詞における構成要素の生起順序には一定の傾向があるとみなすことができる。三つ目は、V2 が主要部の複合動詞の中で、V1 と V2 がともに移動事象を表す場合は、V1 と V2 が同一方向の経路に向かって移動しなければならないことを明らかにしたことである。この特徴はまた、本来方向性を含意しない活動動詞を V1 とする複合動詞にも拡大することができることを示している。この場合、V1 の動作に移動方向が含まれることで、V2 と同一の経路上での移動が実現されると捉えられる。

最後に今後の課題について述べておく。本稿では移動事象を表す複合動詞を中心に考察を行ってきた。しかし、移動事象の観点から日本語複合動詞全体への展望はまだなされていない。また、本稿では具体物による移動事象を中心に考察してきたため、「見上げる」のような松本 (2017) でいう抽象的放射を表す複合動詞は分析の対象外とせざるをえなかった。抽象的放射を含めた抽象的移動についてさらなる考察が必要であると思われる。以上の二点はいずれも今後の課題としたい。

参考文献

- 石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』 ひつじ書房。
 上野誠司 (2007) 『日本語における空間表現と移動表現の概念意味論的研究』 ひつじ書房。
 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房。
 影山太郎 (2008) 「語彙概念構造 (LCS) 入門」 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム

- NO.4』 pp.239-264 ひつじ書房 .
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』 pp.3-46 ひつじ書房 .
- 陳奕廷 (2017) 「基底と精緻化から見た複合語の分類—日本語複合動詞を中心に—」 『国立国語研究所論集』 13 pp.25-50.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」 田中茂範・松本曜 『空間と移動の表現』 pp.125-230 研究社出版 .
- 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」 『言語研究』 114 pp.37-83.
- 松本曜 (2011) 「主語一致の原則と主体的移動を伴う事象を表す複合動詞」 『国立国語研究所 (NINJAL) 共同研究発表会 日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性』 .
- 松本曜 (2017) 「移動表現の類型に関する課題」 松本曜 (編) 『移動表現の類型論』 pp.1-24 くろしお出版 .
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』 ひつじ書房 .
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格表示について」 『言語研究』 110 pp.143-168.
- Goldberg, Adel E (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. The University of Chicago Press.
- Kate, Kearns (2008) *Semantics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In Timothy Shopen(ed.) *Language Typology and Syntactic Description3: Grammatical Categories and the Lexicon*, pp. 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 480-519. Berkeley Linguistics Society, University of California, Berkeley.
- Vendler, Z (1967) *Linguistics and Philosophy*. Cornell UP.

Understand the Word Formation of Japanese Compound Verbs through Motion Events

Xiaoben YUAN

In this paper, the author investigates the semantic properties of word formation in Japanese motion compound verbs (CVs). The conclusions are as follows. Firstly, based on the typology theory of Tamly (1985,1991), the author shows that the head of a motion compound verb can be determined through its semantic property, depending on either V1 or V2 is encoded with a path feature. Secondly, the author categorizes the V2-headed motion compound verbs into 4 sub-types: 1)manner of motion CV, 2)directed motion CV, 3)changing location CV, 4)cause motion CV. The author then finds out cause motion CVs have the highest productivity; whereas manner of motion CVs have the lowest. Thirdly, the author proposes that V1 and V2 have to share the same path for the motion CVs to be formed which is well illustrated through the observation in directed motion CVs.